

「木は地球を救う」 — 24

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

◇鳥居建立の苦労話

第二鳥居用木材の入手については前号で詳細を述べました。いよいよ大鳥居建立に取り掛かる段階まで進んだ。今号では関わった3名の貴重なお話をレポートします。

3名の方とは献木者川島さんと共に台湾に渡り伐採から運搬まで関わっていた以下の方々である。

川村正二氏 日本建築工芸代表(鳥居設計担当)

井上秋元氏 明治神宮の技師、技術の責任者

有村定吉氏 明治神宮建立時の棟梁(鳥居建立責任者)台湾神社建立にも関わる。昭和34年(1959年)独立

◇鳥居造り

工程

・機械製材では無理なほどの巨木

まず長さ16m、末口1.4mの台湾檜の巨木を八角形に製材することだが、深川の製材所に問い合わせると、「どのように挽くのか挽き方がわからないので、立ち会ってください」。つまり「製材できません」と断られてしまった。この一件で深川の製材所は、製材の仕方を知らない。台湾の製材所の方がよく知っているのではないかと感じた。

筆者は驚いた。この話は日本の「木材や」を過小評価している。「立ち会ってください」。と言うのは、荷主の指図通りに挽きますよ。との敬意を払っている言葉。断られたのは、長さ16m、末口1.4mの巨木の製材、まして八角形に製材するのは、製材機の懐と、送材車の送材キャパシティが足りず機械製材では、もともと無理な話であり、設備上やむなく御断りしたと推測する。

「木材や」の一員として

・チェーンソーで八角形

長さ16m(元寸法、仕上げは14m)の丸太に大工が八角形で墨をうち、墨に倣ってチェーンソーで挽く手作業だ。その昔は木挽きが大鋸で手挽きした。現在でも杉、檜など銘木級の大丸太などは銘木市場で木挽きが杓目に倣い手挽きしている。

手挽きは重労働だが木挽き者に危険はないが、チェーンソーの手挽き作業は製材作業のなかで、この上もないほど大変危険な仕事だ。チェーンソーが跳ね返り作業者を傷つける恐れがある。

筆者も若い時チェーンソーの玉切り(横切り)の経験はあるが、八角形挽きの経験はない。恐ろしくて手を付けられない仕事だ。今では禁じられているかもしれない。

・ハンドプレーナーで真円に

八角の角^{かど}を落とし表面を綺麗に鉋掛けし真円を目指して丸く削っていく。この仕事も長手16mに向かって削っていく作業は並大抵な技術ではできない。気が遠くなるほど根気を必要とする名人仕事だ。作業のための足場を作り作業したのではないか。

・表面に凹凸をつける

表面をフラットに綺麗に削ると、確かに綺麗だが、見た目は弱く見える？(筆者は「そうかな？」と首をひねった。)そこで綺麗なツルツルした表面に、わざわざ凹凸(デコボコ)をつけると強く見えるため(実際の強度は変わらない)大変な作業で全て手仕事、手鉋(サジ面鉋)何mmか?写真では幅5mm、深さも5mmくらいではないか?正に仕事は名人芸である。大変な手間だ、恐れ入りました。

◇鳥居の詳細

・名称 明神鳥居 日本の神社で使われている最も一般的な鳥居であり特徴は以下のとおりである

・完成 昭和50年(1975年)

・形式 明神鳥居

・柱は2本

・高さ12m

・幅17.1m

・柱の直径1.2m

・重さ13屯

・島木^{しまぎ}の上の笠木が、中央から両端に行くほど太く反りかえった形になる。反り増しがあると言う。

・貫が柱から飛び出している。副柱がない。鳥居の上に飾りなし。

・逸話

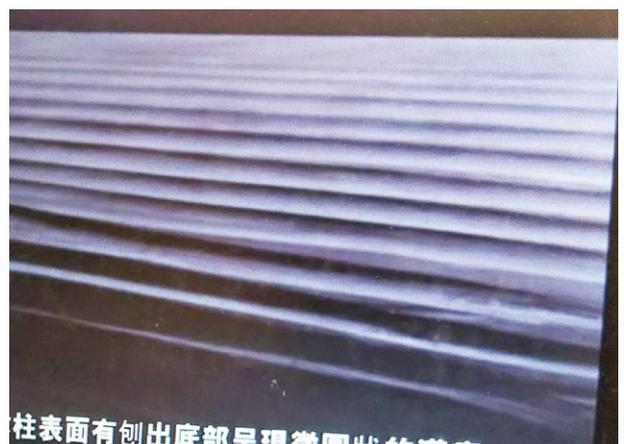
柱の太さを3cm大きくした。大きなものを小さくするのは勿体ないと、自分たちの責任で3cm大きくした。このため基礎のコンクリートを3cm欠き落とした。



ハンドプレーナー掛け



表面デコボコ削り加工中



デコボコ削り後の大鳥居

◇エピローグ

川村氏、井上氏の言葉

日本の伝統技術は台湾に受け継がれ、孫海氏、陳大慶氏の絶大なご協力によりこの大仕事を成し遂げることができた。深く感謝申し上げます。台湾人関係者の皆様のご協力に感動しました。

◇10本の大木のその後は、

4本は明治神宮に使用した。次の4本は靖国神社の中門鳥居に使用されたが平成18年建て替えられ今はない。

◇川島康資氏

「木材や」の鑑として台湾に渡り銘木を探し当て明治神宮、靖国神社に献木した功労者川島康資様のご子孫の消息について手掛かりが掴めた。詳細が判明しだいご報告します。続く。



鳥居



明治神宮百年祭の幟旗